

「心配しないで大丈夫」

マタイによる福音書 6章 25節～34節

説教 本庄侑子 牧師

本日は花を見ながら礼拝を捧げています。イエス様も花を見ながら説教をされました。「空の鳥を見てご覧なさい。野の花を見てご覧なさい」と、指さしながら語られました。

前に広がる世界は苦しみの中にありました。病気で苦しむ人々が多くおりました。心や体にダメージを受けて来た人々です。明日を考えると不安で一杯になり、体や命のことで思い煩う人々だったのです。イエス様の前には弟子たちもおりました。「わたしについて来なさい」と声をかけられ、信じてついて来た人々でしたが、彼らも心配の種が尽きませんでした。

「あすのことを思いわずらうな。」(34節)と、イエス様はおっしゃいます。しかし、私たちはどうでしょう。将来のことに不安を膨らませています。牧師ですら、その時々には悩みは尽きません。私たちは他者に「心配してもしょうがないよ。大丈夫だよ。」と励ましの声掛けをします。また自分自身を納得させようと、そのように思い込もうとします。けれども、結局は心配で一杯になるのです。命も未来も、私たちの手の内には無いからです。根拠のないポジティブさは無力であり、時に相手を傷つけます。

しかし、イエス様は本気でおっしゃいます。「思いわずらうな」と。イエス様には根拠がありました。イエス様の言葉は、父なる神様がどのような方なのかを知っている方の言葉です。鳥も花も、自分で食べるものや着るものを造るのではなく、神様に与えられたものを受け取って生きています。そうして神様は、ご自分がお造りになった命を支え、養い、終わりまで責任をもって導いておられます。そうであれば、私たち人間に対してもそのようにして下さらないはずがないのです。しかも、神様は人間を特別扱いして下さり、ご自分の子どもとして呼びかけてくださるのです。

神様は私たちの父なのだと、イエス様はおっしゃいます。それまで、人々にとっての神様は厳しく近寄りがたい存在でした。しかし、イエス様は「アバ父よ」と親しく呼びかけられました。「アバ」とは「パパ、お父さん」という赤ちゃん言葉です。イエス様は、命のことを思い煩うことなく生きておられました。神様の子どもらしく生きる姿を見せてくださったのです。神様と人間の関係は、人間関係の中では親子関係に似ています。親は子どもをどこまでも追いかけて、必要を与え、危険から守ろうとします。

神様は、どの様なときも私たちに必要なものを考えていてくださいます。必要な状況を整え、必要なものを与え、養ってくださるのです。

聖書を読んでいると、神様は、逃げ出そうとする人、自分の力に頼ろうとする人、反抗する人、それらの人々に対して、ある時は叱り、ある時はなだめ、ある時は説得し、親として関わり続けてくださったことが分かります。

出エジプト記によれば、神様は“寝ずの番”をしてくださる方でもあります。人間の愛には限界があります。どんなに大切に思っている、眠くなったら目を離して眠らざるを得ません。しかし、神様は寝ないで見守り続けてくださるのです。また、申命記によれば、神様は私たちを“ひとみのように”思っていてくださるのです。弱いひとみを囲んで守ってくださいます。

今日は、苦しみの中、思い煩いの中、この礼拝に辿り着いた方もおられるでしょう。しかし、イエス様は仰います。「思い煩うな。心配しないで大丈夫！」と。あれさえあれば、これさえあれば、と思い煩い、それらを得るために命をすり減らす必要はないのです。私たちに本当に必要なのは、イエス様が見せてくださった父なる神様との親子関係です。神様がどれほどに私たちのことを思っていてくださるかを知ることです。

そして、「まず神の国と神の義とを求め」(33節)ることです。神様の国(支配)がこの地上に来ますように。神様の愛がこの私に、私たちの間に、この世界に満ち溢れますように。

イエス様はこの話の後、十字架に向かわれました。罪みれの私たちが、神様を父として生きることができるために十字架で死んで下さいました。「心配しないで大丈夫！」簡単には言えない言葉です。イエス様にしか言えない言葉、しかしイエス様だから言えた言葉です。イエス様の命が注がれた、重く、尊い言葉なのです。

そして今、私たちも心にかかる人たちに、自分自身に、本気で伝えることができるのです。心配しないで大丈夫。イエス様が十字架で死に、復活してくださったから。私たちは愛されている。私たちは神様の子どもとして安心して生き、死んでいけるのだ、と。

(記 説教要約奉仕者)